



食事が終わり、やがてシャトルは大気圏に向けて降下を始める。サラウンド慣れた俺たちも、大気圏突入は経験があまりない。少なくとも俺は初めてだ。シールドで守られているとはいえ、周囲の空気は高温のプラズマとなって流れていく。まるで自分が流れ星になったような感覚だ。その昔から、不具合によって大気圏で燃え尽きた宇宙船も少なからず存在する。一旦保護を失えば、容赦の無い高熱がすべてを焼き尽くすのである。そんなリスクを冒しても帰りたい、地球という場所は、そういう特別な場所なのかもしれない。

そんな事を考えている間に、シャトルは高層大気を突き抜けて成層圏に入る。空の色が黒から紺、そして深い青へと変化していく。その頃には速度もかなり落ちて、シャトルは滑空モードに移行する。このシャトルのエンジンは、それ自体で機体を軌道に上げる力はない。上昇時のほとんどは、地上からの指向性磁場の力を借りて加速するので、最終段階まではエンジンを使わなくていいからだ。降下の時も、滑空した後には宇宙港からの磁場に捕捉されて誘導されるので、非常時でもなければエンジンを使う必要はないのである。まあ、この前はその非力なエンジンにもだいぶ助けられたわけだが、それはつまり、そういう際どい状況にあったということになるだろう。

「もう星は見えなくなっちゃいましたね」

マリナがそうつぶやく。地球の大気圏という深い井戸の、ここはまだ入り口に近い。雲はまっただいぶ下だ。地球はまだかろうじて球の姿を保っているが、空は既に大気の薄いベールに覆われて、太陽光を散乱させている。深い青色だが、もう星はほとんど見えない。

「なんか、落ちてる・・・って感じになってきたな」

「重力に引かれてるって感じよね」

実際、俺たちは濃紺の空から、下方に見える白い雲の波に向かってダイブしているわけだ。サラウンドモードでは、まさにダイブの感覚である。昔から時々冒険家が高高度用の気球を使って上がってきて、そこからダイブするのだが、落下速度はあっという間に音速を超えてしまう。空気の抵抗はまだその程度だ。もちろん生身の人間なんか丸焼きにしてバラバラにするくらいのはあるのだが、下層の濃い大気に比べれば、無いも同然である。地球の大気圏はそれほどに薄っぺらだ。電離圏の上層まで入れても、地球の直径の、ほんの1%か2%しかない薄皮なのである。

ずっと下に見えていた雲の海が、次第に近づいてくる。シャトルは、少しバンクして進路を変える。そろそろ宇宙港へのアプローチに入ったらしい。下方には大きな積乱雲が並んでいる。対流圏に入る直前、軽いショックがあつて、ぐっと速度が落ちる。宇宙港からの誘導磁場に乗つたようである。あとは、着陸コースに誘導されて着地するだけだ。

気がつけば、入道雲の頭はもう横にあり、俺たちはその谷間を降下している。そして前方に、綺麗な形をした成層火山、富士山が見えてきた。その裾野には地球でも有数の宇宙港、フジスペースポートが広がっている。そういえば、ここから旅だって、そろそろ一年半になるな。そして美月に出会つたのも、この場所だった。まあ、あまり思い出したくない出来事ではある。横目で美月を見たら目が合った。おそらく、あいつも同じ事を考えているんだろう。

「当機は間もなく着陸いたします。着陸時のサラウンドモードご使用は、急な景色の変化でご気分を悪くされる方がいらつしやいますので、ご注意ください」

これもお決まりの注意だが、俺たちには関係がない。それくらいで気分を悪くしていたら宇宙船乗り失格だ。実際、着陸速度は結構速い。正確には着地せず磁気浮上した状態で一気に減速し、そのまま誘導路に沿ってゲートまで引かれていく。念のため車輪を出す、ゲートに到着するまで接地することはないのである。着陸は結構混雑しているようで、数キロの間隔をおいて、シャトルが列をなしている。ジョージの仕掛けのおかげで前後の機体の情報はすべてサラウンドの中に表示されている。

「結構混雑してるねえ。アプローチが行列になつてるし」

「こんなのはまだ空いてる方よ。ここは上空待機を食らうことも少なくないわ」

「そっか。私はいつも札幌直行だから、フジはほとんど来ないんだよね」

ケイと美月がそんな会話をしている間に、俺たちのシャトルは一気に高度を下げる。まるで落ちていくような感覚だが、それはそれで面白い。ランウェイ直前で一気に減速し、最後は地上すれすれでランウェイに滑り込んでいく。

「皆様、当機はただいまフジ・スペースポートに着陸いたしました。ゲート到着まで、いましばらくお待ちください」

そんなアナウンスを聞きながら、俺はサラウンドを切った。さて、久しぶりに地球に戻ってきたわけだが、なんとなく気が重いのは、これからあれこれ大変になりそうな予感からだろう。

このメンバーで一緒に動くと、だいたい想定外の事態が起きるのだから。まあ、それも普段な

らば悪くないのだが、地球で、しかも俺の地元の東京でとなると、ちよつと憂鬱になるのだ。

「皆様、長らくの搭乗お疲れ様でした。シートホールドを解除いたします。ドアが開くまで少々時間がかかりますので、準備をしてお待ちください」

俺たちは荷物を取り出すと、それぞれに支度をして、前方のボーディングドアが開くのを待つ。やがてドアが開くと、ボーディングブリッジの少しなまぬるい空気が流れ込んでくる。エアコンディショニングされているとはいえ、宇宙都市や宇宙機内の空気とはどこか違う、自然の空気の香りだ。ファーストクラスの俺たちは、真っ先に降機することになる。コンコースは明るくて、機内になれた俺たちの目には、ちよつと刺激が強い。シールドのおかげで熱は感じないが、透明な天井を通して夏の太陽が真上に光っている。目の前には雄大な富士山の姿。これを見ると、帰ってきた実感が湧いてくる。



俺たちは、とりあえず預けた荷物をピックアップして到着ロビーへと向かう。休暇時期とあってか、到着ロビーは混雑している。さて、ここからは東京都心まで列車を使う。車でもいいのだけど、列車の方がだいぶ速い。アクセスレインは磁気浮上型の高速列車で、ものの20分で都心まで到着する。まあ、荷物を持ち運ぶ手間はやむを得まい。

「ねえ、車にするよねえ」

「え？時間がかかるからアクセスレインだろ」

「そっか、じゃケンジが荷物を運んでくれるんだ」

「おい。自分の荷物は……」

そう言いかけて女子たちの姿を見た俺は啞然とした。ケイと美月は大きなスーツケースをふたつ。マリナとサムは一個だが、これもそこそこのサイズだ。

「いったい、何の荷物だ、それは！」

「あんたね。自分と一緒にしないでよ。女子はあれこれ大変なんだから」

「そうだよ。私も一応は女子なんだからね。いろいろと支度があるのよね。しかも、この後里帰りするんだからさ」

たしかに、美月もケイも実家への帰省を兼ねているわけで、土産のひとつやふたつは必要か

もしれない。マリナとサムは旅行モードの分、荷物が少ないってわけか。しかし、この荷物じや仕方が無いな。俺とジョージの二人で、この大荷物を運ぶのはムリだ。

「しょうがないな、それじゃ車に……」

そう言いかけた時だった。後ろから誰かが、どんつ、と抱きついてきた。

「お兄ちゃんっ！」

驚いて後ろを見ると、妹の沙依さよりだ。

「もう、ずっと手を振ってたのに、お兄ちゃん、気がつかないんだからっ」

妹はちよつとふくれっ面をする。今年、中学2年になった俺の妹は相変わらずの様子だが、どうしてこいつがここにいるんだ？

「お父さんも来てるんだよ。お兄ちゃんたちを迎えにね」

「そうなのか、親父も？」

「うん、表に車を回すから、お兄ちゃんたちを連れてこいって。あ、皆さん、いつも兄がお世話になってます。妹の中井沙依です」

妹は、ここぞとばかり愛想を振りまいている。こういうところは抜かりがない。

「おお、可愛い妹さんじゃない。本当にケンジの妹なのかな」

「あ、もしかして沢村さんですね。お噂はかねがね……」

「ねえ、ねえ、それどんな噂かな？ちよつと気になるかも」

「あはは、それは内緒です。お兄ちゃんに聞いてくださいっ」

「こら沙依、お前なあ、適当なこと言っておいて人に振るなよ」

「いやいや、初デートのエピソードとか、話してくれたじゃない」

「は、初デート？」

俺と、ケイ、それから美月の三人が同時に反応する。

「ちょっとケンジ、それどういう話か聞かせてくれる？」

いかん。美月がかなり怖い顔になっている。

「おい、何の話だ。そんな話してないだろ」

「あれ？沢村さんじゃなかったっけ？もしかして星野さんの話だったかな」

「ケンジ、あんた妹に何話してるのよ！」

「あ、星野さん……ですね。はじめまして。シャトルでの話は兄から色々聞いてますよ」

「おい、沙依……」

「それ、どんな話か興味があるわね。沙依ちゃん、後でゆっくりと聞かせてよ」

なんか、いきなりヤバイ雰囲気だ。沙依の奴め、ここぞとばかり引っかけ回して楽しんでるっぽい。そろそろ止めさせないと後が大変だ。

「こら、やめんか！」

「痛い痛い、お兄ちゃん、わかったよ。止めるからその、アイアンクローはやめてよ」

俺は無意識に、妹の頭をわしづかみにしていた。妹がハメを外した時の対処法は昔からこれだ。

「ごめんなさい。冗談です。でも、皆さんのお話は、本当に色々聞いてますよ。変な話じゃなくて」

「変な話のはずがないだろ。そもそも、そこまで詳しい話をした覚えはないぞ」

「いえいえ、推して知るべしって言うじゃないですか。一を聞いて十を知る……みたいな？」

「お前の場合はただの妄想だろうが」

こいつと口で争って勝てたためしがない。ああ言えばこう言うという具合で、しまいに俺が疲れてしまうのである。

「そうそう。こんなことしてる場合じゃないよ、お兄ちゃん。お父さん待ってるから」

「お前な、こんなことを始めたのは誰だ？」

「あ、皆さん、こちらです」

そういうと沙依は表の方を指さして、さっさと歩き出す。さすがに全員ちょっと毒気を抜か

れた感じになっている。実際、今回の旅行で俺の心配事の半分以上はこういう事態を招く事だったりするのである。おまけに、沙依のテンションは予想以上に高そうだ。これは先が思いやられる。

「楽しい妹さんですね。お兄さんが大好きみたいです。やっぱり兄弟っていいですよね」

歩きながらマリナが言う。いや、マリナさん。あなたは沙依を過小評価してますよ。てか、美月やケイもさることながら、沙依の魔の手がマリナにのびることを俺は一番心配しているのだが。

「いやあ、ケンジからは想像ができないね、あの妹さんは」

「同意」

ジョージとサムはなんだか人ごとみたいに思っているようだが、妹の無差別攻撃の怖さは、そのうち思い知るだろう。



ロビーを出ると、車寄せには夏の日差しが降り注いでいる。もう8月も終わりとはいえ、まだまだ暑さは厳しい。

「お帰り。皆さんもいらっしやい」

「ただいま、親父。迎えに来てくれるんだっと思ったら言ってくればよかったのに」

「すまんすまん、沙依がどうしても行くってきかないし、友達もいて荷物もあるだろうからって、今朝決めたんだ」

「えへへ、沙依に感謝してよね、お兄ちゃん」

「あのなあ……。まあ、助かったのは間違いないが……」

「さあ、みんな、乗って乗って！」

「こら、お前が仕切るな！」

「いいじゃないか。今回は沙依も、おもてなし役だしな。さあ、皆さん好きな席に座ってくださいな」

だいたい、親父は沙依に甘いのである。我が家では、お袋がない時は沙依の天下なのだ。ともあれ、俺たちは車に乗り込む。車と言っても、こいつはかなり大きい。荷物を積み込んで

も8人が余裕で乗れるサイズだ。もちろんこの車はうちの所有物ではない。今の時代では、昔と違って車を所有するという習慣がないのである。そもそも、ほとんどの都市で、車は自動運行の公共交通機関だ。ただ、レジャー用途などには、このように、その目的に応じた車を借りて占有できるようになっている。もちろん、都市部や幹線道路での運転は基本的に自動だ。V DI（バーチャル・ドライビング・インターフェイス）は、自動運転では車の状態や情報をモニタする機能しか使わない。

「いいかな、それじゃ出発するぞ」

親父がそう言うのとはほぼ同時にドアが閉まって、車が静かに動き出した。ターミナルのアクセス道路を半周してから、車は高架道路に上がり、一気に加速する。と言っても、時速は200 Kmくらいだから、列車に比べれば、かなり遅い。宇宙港から東京都心まで40分くらいのドライブである。俺の家までは、なんだかんだで一時間ちよつとはかかるだろう。

「これが噂に聞くフジヤマか。なかなか雄大な景色だね」

ジョージが窓の外を見て言う。

「私も実物は初めて見ました。以前に美術館で中世のウキヨエとかいう絵画に描かれたのを見たことがあるのですが」

やはりマリナは博学だ。いまだき浮世絵なんて、日本地域の住人でもなかなか見ることがないのだから。

「最近、日本じゃ浮世絵なんて見ないわよね。でも、パリの美術館には飾られてるわよ。人類文化遺産としてね」

美月が横から口をはさむ。

「確かにな。でも、うちの近くの大江戸美術館には、あったと思うが」

「エドって、中世の頃の東京の呼び名でしたよね。ちょうど浮世絵が描かれていた頃の」

「この地域の歴史の中では一番特徴的な文化を持った時代。サムライと呼ばれた戦士たちは、自らのプライドを守るために、自分で腹を割いて自殺した」

「サム、よく知ってるじゃないか。ハラキリって奴だよ、それは」

「ケンジ、あんたね。日本生まれならセツプクって言いなさいよ。ハラキリつてのは、後の時代に、欧米人が日本の文化を揶揄して言った言葉だそうよ」

「なんだよ。今時どっちでも同じじゃないか。そもそも、自殺なんてものを、そうやって美化すべきじゃないんだ」

まあ、たしかに美月が言うとおりののだが、こいつに言われるとちょっと面白くない。だいたい、親父がフランス生まれで、パリ育ちのこいつが、そんな講釈を垂れるのが気に入らないのだが。

「日本の武士道はヨーロッパの騎士道に通ずるところが大きいよ。自らの誇りを命がけで守るという気概には、ある種の気高さがあるわ。あんたもサムライの末裔なら、そんな歴史でも勉強したらどうなのよ」

「いや、お前こそ知ったふうな事を言うが、その気概って奴が、その後の戦争でどれだけ悲惨な結果を生んだか知ってるのか？」

「精神文化を悪用しようとする奴らは古今東西、どこにでもいるわ。ヨーロッパの騎士道もヒトラーにかかれれば、彼の野望を正当化する理由にされてしまう。でも、それは精神文化そのものの問題じゃないのよ」

いかん、これは一種の宗教論争だ。どれだけやっても結論なんて出やしない。早々に打ち切るのが利口だ。だが、ここで逃げるようなマネをするのも癪に障る。さて、どうしたら・・・

「人それぞれ、美しいと思うものに違いがあるように、思想や文化もそれぞれ違います。お互いにそれらを尊重しあうことが、争いを避けることになるというのが、二十一世紀中盤に起きた最終戦争の教訓でしたね」

「そうだね。あれは宗教戦争だった。しかも、中世後期の、すでに科学的な考え方が広まった後に起きたという意味で、問題の根深さに人類が気づくきっかけになったんだ。科学も思想も宗教も、それを信じるだけでまったく疑われないなら全部同じだ。その時点で思考停止に陥っているし、それ以上の進歩はない。寛容と妥協は違う。自分が信じることと異質なものを認めることが、逆に自分がそれを信じる理由を深めていくことになる。それは決して妥協ではないんだ」

マリナにあわせて口を開いたのは親父だ。いつから親父はこんな哲学者になったんだ。でもまあ、二人が話に介入してくれたおかげで、俺と美月の最終戦争は回避できそうだ。車は綺麗なハイウェイを一路東京に向かって走っていく。そんな感じでちょっと波乱含みの、俺たちの



夏休み東京ツアーが幕を開けたのである。



無数の星がちりばめられた漆黒の空間を背景に、太陽が輝いている。ここは太陽系惑星軌道面から南側に少し離れたワープアウトゾーン。恒星間航路の宇宙船のワープイン、ワープアウトは重力衝撃波を伴うため、混雑した惑星軌道面ではなく、太陽の極方向へ南北に離れた場所で行われる。そのエリアの一角で、今、巨大な船がワープを終え、太陽系に入ろうとしていた。

「ワープアウト完了、機関異常なし」

「座標チェック完了。予定通りの座標にワープアウトしました」

「よし、太陽系内航路管制にコンタクトを」

「船長、ワープアウト完了、異常ありません」

大柄の男は振り返るとそう言った。

「よろしい。進路を地球軌道へ。あとは管制の指示通りにやってくれ。デイク、到着まで君も少し休むといい。交代しよう」

「了解しました。では、失礼します」

デイクと呼ばれた男は、そう言うとき軽く敬礼をしてブリッジを後にする。貨物船ヘラクレス3、このかなり年季の入った巨大船は、足こそ遅いが、貨物の搭載量はそこいらの船とは比べものにならないくらい大きい。太陽系近傍の恒星系と地球との間を行き来して、機材やら資源を運ぶのが主な仕事である。

デイクビッド・ムラカミ、通称デイクはこの船のナビゲーターであり、副長でもある。そして、彼にはもうひとつの顔がある。電子機器とコンピュータに関しては、名の通った超一流のエンジニアなのだ。この船のコンピュータは古ぼけた図体に似合わず、最新型、いや、それ以上の代物である。それは彼がスペースアカデミーと協力して作り上げた次世代技術の実証機なのだ。この船のコンピュータルームはブリッジの裏手の、堅固な防壁に囲まれた区画にある。船のすべてのシステムを統括するコンピュータシステムはセキュリティ上の理由から厳重に防護されている。この部屋に立ち入れるのは、デイクを含め3人ほどしかない。

コンピュータの中核部はドーム型のシールドで囲まれている。デイクはその前に立つと、仮想表示パネルを操作した。ドームの壁のドアが音も無く開く。中に入ると中央に薄緑色に輝く演算ユニットのタワーがあり、周囲の壁には様々な仮想パネルが表示されている。念のために

言うならば、これらのパネルはアウトバンドを介して直接意識に投影されているもので、物理的にパネルがあるわけではない。ダイブはパネルのひとつを手元に引き寄せると、しばらくそれをのぞき込んだ。

「よし、問題なさそうだな。さて、これからお前の分身をアカデミーに送るとしよう。お前にとっては弟分ができるわけだが、仲良くしてやってくれよ」

そう言うとダイブは、パネルを操作する。一瞬、演算ユニットの光がまたたく。ダイブの脇にもうひとつのパネルが開く。

「やあ、ダイブ。お帰り」

パネルに現れたのは、フランク・リーブスだ。

「よお、フランク。元気そうだなによりだ。そっちの準備はいいか？」

「ああ、ダウンロードの準備は出来ている。いつでもいいぞ」

「そうか。こっちも、いましがたこいつのクロージングを終わったところだ。これから送信する。これは、現時点でのスナップショットだから、ライブでそのままインストールしてくれ。すぐに動くはずだ」

「了解した。送ってくれ」

「よし、送信する」

ダイブはパネルを操作する。通信用パネルにゲージが表示され、データの転送が開始された。稼働中のコンピュータのすべての状態を写し取ったスナップショットのデータ量は数十ペタバイトのオーダーである。太陽系内の高速通信網でも、転送に一時間はかかる。

「着いてから直接持って行った方がよかったか？」

「いや、こっちの連中は待ちきれないよ。そっちがワープアウトするのを首を長くして待ってただけだからな」

「まあ、大事にしてやってくれ。俺も着いたらそっちに顔を出すから」

「ああ、待ってるよ」

ダイブはフランクとの通信を切ると、また正面のパネルをのぞき込む。

「そうか、お前も楽しみにしてるんだな。太陽系内にいるときは、互いにほとんど遅延なしで通信ができる。あれこれ情報交換するといい」

デイブはコンピュータに話しかける。返事はパネルに文字で返ってくる。音にすることもできるが、デイブは音声対話があまり好きではない。会話していると、感情移入してしまう。そうだとするのが彼の理由なのだが、そういういながら、既にかかなりの感情移入をしまっているデイブだった。